太宰府天満宮と幕末

1603 年から 1867 年まで徳川幕府が日本を支配していました。しかしながら、1868 年の明治維新後、新たに即位した明治天皇(1852~1912 年)を中心とする中央集権制が導入され、日本の政治体制は劇的に変化しました。
幕末と呼ばれた徳川時代(1603~1867 年)の最後の数年間は、極度の政治的変動によって特徴付けられました。幕末期は、未知の新機軸や発明品をもたらす外国人の急激な流入と時期を同じくしており、政治改革や天皇への忠誠の支持者に対し、幕府の守旧派は死傷者を出すほどの派閥主義を繰り広げました。
明治維新以前、公家として知られたかつての有力貴族は、幕府に忠誠を誓う派閥の人々によって追われました。公家は、京都に住む日本の貴族階級のことです。彼らは 794 年にその都市を首都として樹立し、その後数世紀にわたって日本の社会と政治に影響力を持ち続けました。徳川幕府の末期には 7 人の高位にある公家が京都から追放され、うち 5 人が大宰府に逃れました。1865 年から 1867 年の間、一行は太宰府天満宮の境内にある延寿王院に避難し、そこで彼らは新しい政治体制のいくつもの構成要素につながる考えを共有しました。このように、太宰府天満宮は日本の歴史における最も重要な出来事の一つの背景でした。
三条実美(1837~1891 年)は、この 5 人の一行の一人でした。三条はその後、内大臣を経て、一時的に、1889 年には臨時の内閣総理大臣を務めました。兜、軍扇、家紋入りの鞍など、ここに見られる品々は三条により太宰府天満宮に献上されました。